

【取扱い厳重注意】

平成24年1月30日

## 聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成24年1月17日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

### 記

#### 第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

##### 1 被聴取者

民主党衆議院議員 寺田 学 (事故当時は内閣総理大臣補佐官)

##### 2 聴取日時

平成24年1月17日午後3時30分から同日午後5時40分まで

##### 3 聴取場所

大手町合同庁舎919会議室

##### 4 聴取者

柳田邦男委員、高嶋智光参事官、飯崎準参事官補佐、仁保智紀主査

##### 5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

#### 第2 聴取内容

事故対応全般について

#### 第3 特記事項

本文において(1)～(6)として言及される避難指示は以下のとおり。

(1) 1Fから半径3km圏内の避難指示(3/11 21:23)

(2) 1Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 5:44)

(3) 2Fから半径3km圏内の避難の指示(3/12 7:45)

(4) 2Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 17:39)

(5) 1Fから半径20km圏内の避難の指示(3/12 18:25)

(6) 1Fから半径20～30km圏内の屋内退避の指示(3/15 11:00)

以上

【取扱い厳重注意】

○質問者 では、最初、全体的な事故対応の流れについて、当時の補佐官、寺田先生が御関与されていた部分についてお話を伺えればと思います。

まず、全体的なざっくりした質問になってしまうのですが、今回事故が起こって、地震・津波、事故とある中で、当時補佐官として全体としてどういう役割を果たされたかというのはどういう御認識でいらっしゃいますでしょうか。

○寺田補佐官 補佐官の一般的なところからですが、補佐官は当時5名、定員全員いたと思いますが、私自身、前々から総理執務室の前にある秘書官室に机を置いて、秘書官室に常駐するような形で補佐官業務をやっていました。ですので、立ち位置としてはかなり秘書官と同様の振る舞い方をするというか、同じような身分とは言いませんけれども、同じような形で仕事をし、総理と秘書官の間をできるだけ円滑にやれるようにというような形で、政務秘書官ではないですが、それに似たような形の仕事をしていました。

震災、地震が起きた瞬間に関して、私は議員会館の自室で参議院の委員会の質疑をチェックして、前の日も徹夜だったものですから、少しうとうとしたときに揺れが来て、それでエレベーターが全部止まったので走って官邸に行ったというところがあります。

こういう形で時系列をだっとなきゃダメでも大丈夫ですか。

○質問者 はい。

○寺田補佐官 その上で官邸に着いたときには、もう総理はたしか地下の方に下りられて、危機管理センターに行かれていましたので、5階にいる秘書官とともに大体の状況を把握していたというのがまず第一歩です。その以後に関しても、秘書官の入りにくい会議体には入っている部分はありましたけれども、補佐官というある種ラインの中に入っていない、総理の下にぼんと付いている役職でしたので、入っている会議、入っていない会議というのが余り規則性というものが無い中で重要な会議にも入っていたり、縷々日々行っている会議に入っていなかったり。特に官僚の皆さんが全員集まるような会議には一切私は出ない形になっておりましたので、そういう形で震災、特に原発対応のときには折に触れて仕事をしていたと思います。

○質問者 わかりました。このまま時系列的にお伺いできればと思うのですが、地震があつて官邸に戻られたとき、総理は地下におられましたか。

○寺田補佐官 恐らくもう執務室にはいらっしゃらなかったと思います。

○質問者 それで、補佐官御自身は5階にいらしたのですか。

○寺田補佐官 何度か下にはおりましたけれども、基本的には5階の秘書官室の方におりました。

○質問者 その後、総理は5階に上がって来られたのですか。

○寺田補佐官 5階に上がって来られたと思います。細かい時系列的なところまで正確に覚えていないですが、その後、総理の1回目の記者会見がありましたので、記者会見でどのような内容を話すのかということを経験とともに総理と打ち合わせをした記憶があります。

【取扱い厳重注意】

○質問者 わかりました。その当時は地震があつて、まだ事故の発生には至っていないような段階だと思うのですけれども、その当時はどういったことをされたのでしょうか。

○寺田補佐官 震災が起きて第1回目の記者会見でしたので、基本的には地震・津波の情報が多くて、今、振り返ってもあのときの最初の記者会見で原発に関しては安全に停止をしたというようなニュアンスのことを総理は発言されておりました。それまで原発の発想は私の頭の中にはなかったのですが、それが終わられてからだと思えますけれども、ちょっと正確ではないかもしれませんが、寺坂院長と、あと勿論、海江田大臣もいらつしゃって、全電源が落ちているという話があつたと記憶しています。その場には私もいました。

やや印象論になってしまつて申し訳ないのですが、とにかく総理が何度も報告を受けていることに関して、「本当にすべての電源が落ちているのか、予備バッテリーがあるはずだろう」と。私はその知識はなかったのですが、「予備バッテリーも全部水没しました」と。「水没しても何かほかはないのか」「ありません」と。「それは水没したものは水を抜き取つて使えないのか」「恐らく使えないと思えます」と。とにかく電源というものはすべて可能性としてなくなったということを総理が本当に執拗なぐらいしつこく問い合わせているのが非常に印象に残っています。

○質問者 それは、場所はどこになりますか。

○寺田補佐官 執務室だと思います。

○質問者 総理執務室ですか。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 それは寺坂院長に対してですか。

○寺田補佐官 寺坂院長だったのか、寺坂院長以外にもどなたか来られていたのか、ちょっと前後して東電の方がいらつしゃつたのかどうかも、その方がどなたであるのかと、寺坂さん自体も私、その瞬間にはわかっていませんでしたから、後々になってあの人が寺坂さんであるといつて、ではそのときのあのお顔と一致するかなといふのはちょっとあいまいではあります

ただ、保安院の院長が来られているというような記憶はあるので、海江田大臣と一緒に来られていると。それ以外の方も、恐らく同じジャンパーを着ていらつしゃつたような気がするのです。

○質問者 わかりました。その海江田大臣がいらつしゃつたときの際の話なのですけれども、菅総理御自身、途中で与野党の党首会談の方に出席をされていると思うのですけれども、その際、どういった経緯で総理が与野党党首会談に出られたかといふのは、記憶はございますか。

○寺田補佐官 正直言うと、与野党党首会談に出られているような記憶は、5階にいた人間として余りないぐらい、恐らくかなり短かつたのかなと思えます。なので、当然、総理自身として先ほどの執拗に何度も繰り返し聞いたというのに象徴されるように、私のよう

【取扱い厳重注意】

な素人にとってみると何が起きているのかわからないのですけれども、電源が喪失していることに対する重大さを非常に感じられていましたので、そこら辺は余り何かに断絶したというか、総理がどこかに行かれたというよりは、そこから既に、いわゆる原発対応の緊迫した雰囲気が始まっていたのだなというのが、今思い起こすと感覚としてはあります。

○質問者 わかりました。その後、緊急事態宣言が19時3分に発出をされまして、第1回原災本部会合がその後開かれておるのですけれども、それには御出席はされましたか。

○寺田補佐官 本部会合等、そういうような、言わば閣僚の方々が集まるところにはその後も含めて一切出ておりません。そういう場合にはずっと5階におりました。

○質問者 その間というのは、どういったことをされていたかというのは、記憶はございますか。

○寺田補佐官 その間というのはどの間ですか。

○質問者 総理が第1回原災本部会合に出られて、その当時は別の部屋に行かれていますと思うのですけれども、そのときに補佐官の方は5階で。

○寺田補佐官 秘書官室にはいたと思います。基本的にそこに自分の机がありますので、そこに座っていましたね。私の中の記憶で言うと、もうすぐに電源車の手配まで飛ぶかどうか別ですけれども、とにかく電源の手配は必要だということで、それを秘書官たちと一緒にやっていたから、電源車の手配の仕事をしていたと思いますし、総理自身に対しては前後しているのかもわかりませんが、とにかくこういうことが起きた場合の法的な体系と申しますか、どのような助言組織があって、どのような形で何ができるのか、何をしなければいけないのかということ非常に気にされていた記憶はあります。なので、電源車の前にそういうような話がありましたから、そういうような形で総理が会議に出ている間の正確な記憶ではないですが、次の記憶がある電源車まではそういう形でどういう法律のたてつけがあるのかという話をしていたと思います。

その後、恐らく班目さんが来る形になると思いますけれども、それはたしか総理がこういう場合にはどういう方を呼ぶことになっておるのかという仕組みにのっとってこういう方ですと、保安院長であり安全委員会の委員長という形でお呼びになられている記憶はあります。

○質問者 班目委員長を呼ばれたのは官邸5階に。

○寺田補佐官 私は官邸5階に来られた記憶があります。

○質問者 それで緊急事態宣言が発出されまして、その後、原災本部会合が終わり、その日の夜9時23分ごろに3kmの避難区域の発表というものがなされておるのですけれども、そういったことを決める会議の場に補佐官はいらっしゃった御記憶はございますか。

○寺田補佐官 結論から言うと、私はそのときにはいないと思います。質問事項にありましたので、自分がこの節目節目にどのようなところにいたのかなというのはありますけれども、避難区域等を決めた場所が多分2つあって、前半は地下の危機管理センターだと思います。この場合でいくと、恐らく3kmと10km、朝の5時44分までは断続的な形です

【取扱い厳重注意】

けれども、総理が下に下りられたときにお決めになられたと思います。その後からの7時45分は総理はいらっしゃらないですね。ヘリコプターから下りられたと思うので、10kmの避難指示なんだというのは多分5階で決められたと思うので、そのときには私はおりました。なので、今、御質問があった最初のタイミングに関しては、私から聞くのもあれですけれども、総理は下にいるのではないですか。

○質問者 3kmの方は、今まで関係者の方に話を聞きますと、どうも5階の方で決まったというような話なのです。

○寺田補佐官 話は前後してあれですけれども、私と細野さんが基本的に原発に関して手伝う補佐官というのは雰囲気としてあって、総理が記者会見をやられて班目さんたちともお話をされて、電源車の手配だということを5階ではやっていたのです。ただ、総理にはちゃんと下に下りていただきましょうと。下には携帯が繋がらないという環境がありますので、黒電話を1本引いて、5階にダイレクトにつながる電話を用意する上で総理には下に下りていただいて、危機管理センターの奥にある中2階みたいな小部屋に入ってもらおう手配はしたのです。

そのときに私と細野さんの2人で下に下りて行って、細野さんと避難区域の策定と電源車の手配という大きな柱があったので、当初、細野さんから寺田君の方に住民の避難の方をやってねみたい、私は電源車をやるわみたい感じで、秘書官とは私の方が付き合いが長いとか仕事を一緒にしていましたので、秘書官が今いろいろやっている電源車の手配は私の方がいいと思いましたので、私は5階に上がりますと言って、細野さんは下に残られたと思うのです。なので、そのときは多分下にいらっしゃったとは思いますが、5階なのかもしれません。そのときにそういうことであれば私は参加していないと思います。

○質問者 今、前半は地下で後半は5階と言われた分かれ目の10kmというのは、確認なのですけれども、(1)のときには寺田先生の御記憶ですと、これは地下の方だったのではないかと。

○寺田補佐官 危機管理センターの小部屋の方でお決めになられたと思うんですけれどもね。

○質問者 (2)は、総理はいらっしゃらない時間ですか。

○寺田補佐官 (2)はおります。(2)は5時44分なので、官邸からヘリコプターが飛ぶ前に危機管理センターに下りていますので、その危機管理センターの小部屋で議論された。これははっきりとした記憶があります。

○質問者 (3)がいらっしゃらないのですね。

○寺田補佐官 7時45分は福島にいます。

○質問者 この次から。

○寺田補佐官 その12日の17時の方は、総理は恐らく下には行かれていないと思うので、多分上の方だと思います。

○質問者 その間は、ちょっと話が戻るのですけれども、5階においては電源車の手配の

【取扱い厳重注意】

話をされていたと。具体的にはどういった方とどういった内容のことですか。

○寺田補佐官 保安院を通じてなのか、保安院を通り越して東電のどれかなのか、はっきりとした記憶はないですけれども、いずれにしてもその両方、どちらかから、とにかく電源車がどこにあるのかというような把握から始まったと思います。基本的なスタンスは、勿論、事業会社の東電及び他の電力会社が一番詳しくて、どこに何があってというのはありますけれども、政府としては高速道路を優先的に通せたり、ヘリコプターで吊って持っていけないとか、サポートとしてできるだけ早く現場に到着させる手段というものを後方支援的にやろうという雰囲気で行っていました。

自衛隊のヘリコプターか、米軍の話まで出ていたか定かではないけれども、いずれにしてもヘリで吊るために電源車の重量やサイズとかをできるだけ早く自衛隊の担当者の具体的な氏名まで出して言ってくれと東電側に投げたけれども、なかなか話が来ないとか、そういうような形でやっていたし、何々インターから電源車が1台乗って何時間かかかってどこに何時間で着くとか、そのときに警察側の秘書官が手配をしてきっちりそこまで着くようにとかというのを直接やっていた分もありますし、窓口的に下でやっているのを上で情報を一元的に管理していたのがありますけれども、そういう進捗管理をしていました。

一定程度の動きがあり次第、先ほど申し上げた黒電話だったかな、電話番号をつかって、総理のいる下の小部屋に直接つながるような形を取っていましたので、そこに動きがあり次第お電話をして情報を上げるということで、電源車の進捗だけは5階で別にある程度ウォッチをしていた、御報告を下にしていたというのが業務内容でしたので。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、この電源車の話が地下の危機管理センターではなくて5階の方で別途検討していたというのは、それは何か5階でやらなければいけない理由があったのでしょうか。

○寺田補佐官 安易な推測では余り言えないのであれですけれども、私も多少その点に関しては、5階の秘書官でやることに対しての違和感がありました。ただ、秘書官たちの動きを見ていると、それは当然危機管理センターの人間であったり、自衛隊であれば自衛隊本省の人間を含めて連絡をしていた部分もありますので、そこら辺はただ単純に人としての秘書官がやっているというよりは、組織としてやっているような雰囲気があったので、そういうような最初の多少の違和感というのは途中からなくなりました。

ただ、危機管理センター自体がそのときに何をやっていたのかというのは、私は知るよしもなかったわけですから、いずれにせよ東電側とつながっている部分でそういうような電源車の手配をするのが先決であり、それに対しての助力が必要となっているという環境でしたので、お手伝いをしているというところが現実的なところでした。

また、実際的には直接的な手配云々というよりは、どのような形になっているのかということを経理の秘書官たちがウォッチをして随時情報を上げて、それ以外の避難区域の策定とかもやられていたのだと思いますけれども、言い方は難しいですけれども、そういう

【取扱い厳重注意】

ことに御専念いただけるように、秘書官たちが大体の進捗状態をウォッチして御報告を上げるといふ形なので、手配という言葉が適切かどうかやや難しいところはありますね。

○質問者 わかりました。

○質問者 本来だったら保安院がそういうことをやるべきで、総理官邸の秘書官なり秘書室なり、そこがやる話ではないのではないかと思うのですけれども。

○寺田補佐官 私も先ほど申し上げたとおり、当初そういうような違和感がありましたけれども、最後に申し上げたとおり、やや状態がどうなっているのかというのをウォッチするというような形でしたので、直接的に何か秘書官がブリッジをかけるような形でやったのは自衛隊との連絡ぐらいかなと。多分そこは保安院としての所掌を超えているのか、下の危機管理センターとしてもなかなかレスポンスが難しいのかわかりませんが、どちらかというに進捗状況をチェックしお伝えをするという役割に近かったです。

○質問者 その当時、電源車の情報というのは直接地下にオペレーションルームなどを通じて総理に上がるというルートではなかったのでしょうか。

○寺田補佐官 そういうルートも同時に確保されていたかもしれませんが、その確認は、私はしていません。

○質問者 相互の、保安院に設置された ERC だとか、管理センターだとか、あるいは5階の、お互いにどういう連絡を取っていたのか、あるいはそこと連絡を取っていたのかどうか。それとも各秘書官の自分の出身庁と連絡を取っていたのかということについては、寺田先生の方では把握されていないということですか。

○寺田補佐官 そうですね。一義的に保安院から上がってくるのか、東電から上がってくるのか、秘書官たちが情報、別に全員が自分の省庁から情報を得ているわけではないでしょうけれども、上がってきた情報に関してホワイトボードとかに何時着とかそういうような形で情報を整理、ウォッチしていたというのに近いですね。なので、そこはほかの方にもお聞きになれるのかもしれませんが、警察の秘書官の榊田自体が下の危機管理センターから聞いているのか、貞森が保安院から聞いているのかというような形か、私は出どころに関してはそこまではっきり把握していませんでしたから。

○質問者 この当時の状況をこれまでいろんな方にお話を伺ったのですけれども、総理が5階にいらっしゃることもたびたびあったようなのですけれども、寺田先生の印象として、総理は基本的に地下にいらっしゃるということですか。

○寺田補佐官 いつまでの話ですか。

○質問者 視察に行かれるぐらいです。

○寺田補佐官 そこまでの長いスパンで言うところとちょっと一区切りで言えないのですけれども、オバマ大統領と電話会談をたしか未明ぐらいにされているのですね。政府のあれを見ると多分わかると思いますが、それまでの間は下にいらっしゃったと思います。

恐らくオバマ大統領との電話会談は下ではできませんので、5階の執務室でするために準備段階から上がられてきていると思います。それから私と秘書官と一緒に朝5時前、

【取扱い厳重注意】

4時半ぐらいに危機管理センターに下りるまでは、5階の執務室内ないしは執務室の奥の方に総理はいらっしゃった。

○質問者 わかりました。その電話会談が終わられて5階にいらっしゃる間というのは、総理はどういったことをされていたのですか。

○寺田補佐官 そこからは時系列的に言うとベントの相談とか何かが多分来ているとは思いますが、私はそのベントを了解する、しないの打ち合わせに入っていませんので。たしか総理が秘書官に1時か2時ぐらいの段階で、明日朝一番で被災地を、福島を当然含めた上で、現地へ赴くことを用意しろというので難しいですけども、そういうことを準備、最終的に行くことと決めたわけではないのですが、そういうようなことを判断した場合にできるようにしておけというような用意の指示が出ましたので、そこはもう警察の人間、経産の人間含め、秘書官たちと大体の大きなプランと乗務員含めての調整に私は入っていたので、そのとき総理は恐らくベントの話がされているかもしれません。なので、そこは私は4時半と一緒に下りるまで総理とお会いしていません。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、今の話は12日の午前1時か2時ごろでしたか。

○寺田補佐官 はい。それぐらいです。

○質問者 その朝一で第一原発に行くことになった場合、行けるように準備しておけという趣旨の御指示。これは直接寺田先生がお聞きになったのですか。

○寺田補佐官 私ではないです。多分政務秘書官の岡本に多分一言総理が御指示されたと思います。その岡本から私を含めて秘書官たちが集まってこういうようなお話があったので行くことと判断するとしたらどういうプランがあるのか、どういう経路があるのかということも検討に入った記憶をしています。

○質問者 その話を寺田先生がお聞きになったのは、5階にいらっしゃる時ということですね。

○寺田補佐官 勿論そうです。

○質問者 岡本秘書官からお聞きになったということですか。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 総理はそのときには地下の方の中2階の部屋にいらっしゃるのですか。

○寺田補佐官 もう時間的に言うと、そこら辺の1時か2時かというのは微妙なですけども、オバマ大統領が多分12時とかそんなではないですか。明けるか明けないかのころかそこら辺なので、その後が多分岡本は5階で言われていると思うので、5階で総理から指示を受けて、5階にいた私も含めて秘書官たちで設計図をつくったというところだと思います。

○質問者 視察についてなのですけども、これは総理御自身の御発意だったのですか。

○寺田補佐官 発意という言葉に返すとしたら発意だと思います。

○質問者 どういった趣旨で視察をする必要があったか、そういったことというのは秘書



【取扱い厳重注意】

官からは。

○寺田補佐官 直接、一番最初の瞬間に私は立ち会っていないのであれですが、後々いろいろ話す意味においても、被災地の現場、津波の現場も含めてしっかり見たい。ただ、下に下りるということになるというんな方の労力を割くので上から見るしかないかというのは当初からあったと思います。

福島に関しては、11日の夜の段階で既に東京電力及び保安院からの情報が余りにも断片的であり、予測性の伴わない事務的な話であったり、電源車の手配もそうでしたけれども、そういうことだったので、現場の方としっかりちゃんと話さなければいけないという問題意識は総理の中にはあったと思います。

○質問者 何か具体的な出来事があって、これは現場に行かないといけないというよりは。

○寺田補佐官 発意の段階ではそのような具体的な事実はないと思います。

○質問者 わかりました。その当時、現地に行くということを聞かれて、どういった御印象をお持ちになりましたか。

○寺田補佐官 言い方はちょっとポップで申し訳ない。なかなかアクティブな総理でしたので、総理らしい発意だなと思いつつも、ただ、本当に未曾有の災害が起きていますので、それ自体がどのように現場に影響を与えるのかということも考えましたし、正直申し上げて私は福島に行くことに対しては、恐怖感がなかったと言えようそになると思います。

ただ、総理自身としてさまざま考えられた上でのお考えだったのですから、そこはまず作業としては進めよう。総理が官邸を離れられるので、それは長官を含めて主要な人間、立場の方への御案内と一定の御了解をいただかないというところは思っていたと思いますし、そういうような形で枝野長官、福山副長官含めてお話をした記憶はあります。

○質問者 その準備を進めるに当たって、先ほどおっしゃったように総理自身に危険が及ぶ可能性もあったりするわけですし、その準備段階で検討された事項というのはどういったことなのですか。

○寺田補佐官 身の危険とかの上での準備ということですか。

○質問者 及び指揮官がその場所を離れるとか、さまざまなその後のこと。

○寺田補佐官 正直なところ、その場で、自分自身怖かった部分はありましたけれども、命まで落とすというところまでは、私の原子力に関する知識が少ないせいかもしれませんし、当時まだ11日明けて12日ぐらいのときには、すごいことが起きているといえども、具体的な事象というか当然その後における爆発も起きていませんから、そこまで身の危険は感じませんでした。むしろスーパーピューマという陸自のヘリコプターに乗っていくのですけれども、それ自体と連絡はつくのかどうかとか、随時官邸との連絡をつけられるかどうかというところ、そういうようなところに気は使いました。スーパーピューマ自体は連絡をつけられるという報告を受けましたし、F1自体が電話がなかなか通じないところだということで、いわゆる衛星携帯を用意して持っていくとか、そういうような準備をしていましたし、あとスーパーピューマ自体、定員が非常に少ないので、総理が行かれる場合に

【取扱い厳重注意】

において必ず必然的に乗る警護官、秘書官、医務官を除いた人間でだれが行くのかというところの調整も気を使いましたし、貞森秘書官とはマスコミは基本的には総理が行く場合は同行があるのですけれども、制限の問題と行く場所の問題もありますので、そこら辺を記者クラブと調整したりというものに時間を割いていました。

○質問者 当時、実際、現地の方には寺田先生と、あと班目先生も行かれた。

○寺田補佐官 委員長は行かれました。

○質問者 どういった方を人選されたというのは。

○寺田補佐官 班目委員長に関しては、恐らく総理としても何かあった場合に助言を受けてその場で決めなければいけないことがあるということをお想像されたのかもしれませんが、そういうことで一番政府に対する諮問する立場の人間を連れていくという、責任者を連れていきたいというお気持ちがあったのだと思います。早い段階から班目さんが行かれることに関してはセットされていたような気がします。

○質問者 総理の御意向としてということでしょうか。

○寺田補佐官 総理の御意向なのか、その後、さまざまな方に総理が数時間離られるという場合においての御助言があったのかもしれませんけれども、最終的に本当にバッチが付いている人間はだれが行くのかというところであったり、マスコミはだれが行くのかということがずっとブランクになり続けましたけれども、それ以外の方はほぼ必然的に早い段階で決まっていたような印象がありますね。

○質問者 最終的に寺田先生が御同行されたわけですが、そうなった経緯というのはどういったことですか。

○寺田補佐官 立場的に言うと福山副長官か私であろうと。長官は当然離れられませんし、藤井副長官に行っていただくわけにもいきませんし、それ以外の人間といっても政務三役になりますから、福山さんか私かという話のときに、東北の人間だということ、私も秋田ということで私が乗りますというお話を。

○質問者 寺田先生の方から。

○寺田補佐官 福山さんは勿論、ラインの中に入ってお仕事をされていますので、こういう場合には私の方がいいだろうと自分で判断しました。

○質問者 わかりました。

○質問者 ちょっとその点に関してなのですが、寺田先生と細野先生との役割分担というので、細野大臣が原発、寺田先生が津波の方という大きな役割分担はどこかの段階でされたことはありましたか。

○寺田補佐官 私が津波というのはなかったです。

○質問者 地震そのものといえますか。

○寺田補佐官 原発と何とかというよりは、むしろその後も含めて 17 日ぐらいまでそうですが、両方とも原発に関わっていて、やはり私自身、冒頭申し上げたとおり、秘書官的な立ち回りがずっと今までの慣例でありましたので、結局、総理自身が原発に対応

【取扱い厳重注意】

している以上そちら側に入ると。ラインの人間でない以上、総理側に付いてやるということなので。

先ほど申し上げたとおり、何時くらいか、11日の夜に下に下りて、電源車と住民の避難という話に関しては細野さんが住民の避難の方をやりましょうと。私は秘書官たちが今ある程度情報をウォッチしている電源車の方にいきますという役割分担を細野さんとはしました。

○質問者 わかりました。失礼しました。では、済みませんでした。

○質問者 そうしますと、原発対応以外の部分で寺田補佐官が当時対応されていたということですか。

○寺田補佐官 私は津波に関しては。

○質問者 津波とか地震とかですね。東北全般。

○寺田補佐官 地震に関しては一切関連していません。勿論、その後を含めて大きな余震等ありまして、秘書官自体が動く場合及び総理に関して地震・津波に関して何かある場合には私も同席したりということはありませんでしたが、そもそも補佐官自体は下に別に事務局は何も持たない人間ですので、私は基本的に総理に近い立場にいるというか、物理的にも近い立場にいるというところにとどまります。

○質問者 わかりました。視察の話に戻るのですけれども、先ほどの話では総理からは準備をしておくようにという指示があって準備を進められたのですが、最終的に行くことになったのはいつごろでどういった経緯でというのは。

○寺田補佐官 時間的にはもう6時。出発の一応準備した段階での時間が6時で、余りそう簡単にずらしたりできるような話ではなかったのです。勿論それは現場のこともありませんし、スーパーピューマ自体が官邸の上でホバリングをし続けている時間がどうこうとか、そういうような制限もあって、ある程度の仮どめをして組み立てていました。

4時から5時に変わるころに総理と一緒に下に下りて、そのときにたしか福山さんだと思うのですけれども、福山さんと総理と私と岡本秘書官、あとほかの秘書官もいますけれども、一緒に下の危機管理センターまで下りていくときに、歩きながら福山さんからベントができていないという報告と周辺の線量が高くなってきているという2つの報告を受けているのを私も印象的に聞いた記憶があります。

物事がもう快方には全く向かっていないのだなという印象を持ちながら、総理とともに危機管理センターの奥の中2階のお部屋のところまで行って、私自身は一緒に視察に行くことになっていますので、視察関係の最終的な詰めを部屋の外に出てやったり、時々中には入りましたけれども、基本的には部屋の外に秘書官たちがずっと連なっていますから、そこら辺と色々な打ち合わせをしていました。

最終的に6時にして、報道にもそういうふうに、当然総理動静ですのでお伝えしなければいけないので、マスコミたちも6時には官邸を出るのだという話があったので、恐らくその間に避難区域の拡大であったり今後どうなるのかという見通しを長官や海江田大

【取扱い厳重注意】

臣や細野さんも入られていたと思いますし、福山さんも当然入って、安全委員会、あと保安院も入られてお話をされている中に、時間が来ましたのでカットインして入って、視察の時間が来ておりますというお話をしました。

総理からはどう思うかというお話があったので、私の担当している部分というか、マスコミとの関係とも含めたところで助言する部分がありましたので、6時にお出になられるというお話をして準備をして急遽取りやめるということになればそれはそれで1つのいろいろな意味でのメッセージ性にはなりますと。そこを含めた上で御判断くださいというお話をして、総理がでは行くというお話になったので、その後6時15分ぐらいに官邸を出るということになりました。多分6時前後に総理としては最終的に行くという決断を下したと思います。

○質問者 そうしますと、避難について協議をされている場所に割って入って、そこに総理が既にいらっしゃった。

○寺田補佐官 勿論いらっしゃいました。危機管理センターの奥の小部屋です。

○質問者 そこに補佐官であり、秘書官が入っていった。

○寺田補佐官 私だけが入りました。

○質問者 わかりました。実際行かれて、1Fに限って言えば吉田所長と会われてお話をされているのですけれども、現場でどういうことをしなければならないとか、総理がしたいとか、そういう総理の御意向というのはあったのでしょうか。

○寺田補佐官 ちょっと時系列的にお話をすると、グラウンドに降りて、もう防護服を着た方が2名いらっしゃって、それ以外に防護服を着ていないのは吉田所長と副社長だと思います。いらっしゃって、マイクロが用意されていまして、マイクロに乗りました。マイクロの右側の前方に総理と武藤副社長、恐らく吉田所長と班目委員長、池田元久さんもいらっしゃったと思うのです。秘書官と私も乗っていったのですが、そのときから武藤副社長には総理はかなり強い口調で何でベントはまだできていないのだということをお話されていたと思います。ただ、武藤副社長の声自体が特別大きいものではなかったもので、それにどうお答えされたかわかりませんでした。

重要免震棟に着いたのですが、私の印象としては、およそ一国の総理が扱われるような扱い方ではまずなかったです。その当時、二重扉だったのですが、まず「早く入れ」と大声でどなられながら全員がまず一重の中に入って、二重が開く前に一重が閉まって、二重扉が開いて、だれかが誘導するような雰囲気があったのだと思いますけれども、奥の方に歩いて行って、線量計を当てられるところに並んだんです。勝手にわかりませんから、総理も線量計で体を測られていて、恐らく最初はそういうものだと思ったのですが、なぜ私はこれをされているのだという話になって、とにかく早く打ち合わせをしようということで打ち切られて上に上がっていきます。私も別のレーンに並んで測られていたのですけれども、そのまま上に上がって行くのですが、だれかが1人ぐらいは、恐らく迎えに来られただれか事務的な方が先導していると思うのですが、もう階段の両脇とかも作業員とかが

## 【取扱い厳重注意】

ぞろぞろ立っていて、印象論で言うとかなりうつろな目をしながらやっているのも、もうほとんど作業の真ただ中に飛び込んでいったような感じでした。

部屋に着いたのですが、ちょうどこれぐらいの部屋でしたけれども、どなたもいらっしやなくてこれはどうなっているのだという話になった後にまた改めて武藤さんと吉田所長が来られて、こういうような長テーブルに座ってお話を始めた。

やはり総理から聞かれたのは今後どうなるのだという見通しと、ベントは何でできないのだという話をされていました。最初に多分武藤副社長がお話をされていたのですが、私が聞く限りにおいても、あいまいな要領を得ないような形でもありましたし、これは吉田さんが言われたのか、武藤さんが言われたのかわかりませんが、私のはっきりと記憶しているのは、ベントがなぜできないのか、これからどれぐらい後にベントができるのだという話のときに、電動のベントの準備をしていますと。手動でベントをするかどうかを1時間後に決めますと。「電動ベントはどれぐらいになったらできるのか」と言ったら「4時間後です」と言われて、物すごくゆっくりしているなというのを私は印象として記憶しています。

総理の方からとにかく早くやれという話をされて、言葉そのものの記憶はないですが、吉田さんが前向きな話をされた記憶があります。私の個人的な素人的な感じで見ても、非常に吉田さんの方がポジティブに何か解決しようという意識を持って、かつ体系的に物事をとらえている感じがありましたけれども、武藤さんはどちらかというとなぜできないことを列挙しているような雰囲気があったので、非常に武藤副社長に総理は厳しかったですし、吉田さんに対してはかなり総理からも建設的な話をしているという雰囲気を感じられましたが、重要免震棟に入るときの雰囲気を含めて物すごく殺気立っている雰囲気だったので、一層総理自身として口調がきつかったという印象があります。それは30分か40分くらいありました。

○質問者 わかりました。当時、視察を終えられた総理が何か感想としてよかったとかそういうことをおっしゃっていた記憶というのはございますか。

○寺田補佐官 吉田所長とお話しされたことに関してはよかったと。恐らく前日から東電の本社側と話しているけれども、わからないであったり把握できていないとかという話が多かったですし、11、12、13、14 ぐらいまで一番本当の物事が動いていたときに総理が一貫して言っていたのは、「とにかく物事をパラレルで考えろ」という言葉で言っていたので、リスク案件は全部出して、1号機から何号機まで、2Fもあるという全部のことを書き出して、それがどのように進捗しているのかということをやっとチェックしてパラレルで全部対抗策を打ってくれということをやっていたのですが、東電側がそういうような雰囲気ではなかったもので、それがかなりブラストレーションにはなっていたと思います。

それが吉田所長と会われて、吉田所長自体が非常にそういう意味でのパラレルで物事を考えてやっている雰囲気を感じ取られたようで、その点が会ってよかったし、現場監督と

【取扱い厳重注意】

しては彼なら任せられるという印象を持たれたのは近くにいて思いました。

○質問者 わかりました。視察が終わって、その後、官邸の方にまた戻って来られるのですけれども、戻って来られてからの動きというのでしょうか、総理はそのまま原発対応に当たるような形だったのでしょうか。

○寺田補佐官 原発対応に当たるといっても、ベントをするのを待つという言い方もあれですけれども、あと現場の作業をしてもらうということですし、その後自体は総理自身として返ってきてすぐまた執務室に何かというよりは、ちょっと一度奥の方に入られて休憩をされていたか、何かをお考えか、いずれにせよ執務室でだれかとお会いしていたというような記憶は、とりあえず12日の帰ってきてからの午前中ぐらいまではないです。

○質問者 戻ってこられて補佐官御自身はどういったことをされていたのでしょうか。

○寺田補佐官 私は一度、走れば5分で宿舎に着きますので、宿舎に帰ってシャワーを浴びて、着替えてまたすぐに官邸に戻って、いない間の話とかを秘書官から聞いたりしていました。一夜明けて報道も含めて全体の状況もお話をしていますので、政府として把握している状況と報道として把握している状況をいろいろ見ていたというのがそのころの午前中の記憶です。

○質問者 わかりました。その後、少し時間は飛ぶのですけれども、同じ12日の午後3時過ぎに1号機が爆発をするのですけれども、そのとき補佐官は官邸にいらっしゃったのですか。

○寺田補佐官 5階にいました。そこから後はもうほぼ5階に。

○質問者 爆発したということはどういう形でどのタイミングでお知りになられたのですか。

○寺田補佐官 結論から言うとテレビです。警察の秘書官が基本的に危機管理センターからの直近の情報を上げる役割になっていました。秘書官と秘書官付室の人間です。あの当時、何か白いのが出ているという噂があるとか、そういうような情報は多分危機管理センターも把握していたように思います。ただ、それが何なのかというのはわからないから確認中とかというレベルで官邸の情報というのはその程度だったと思います。

テレビで爆発の映像があったのでそれをお伝えした。ただ、テレビの全国放送で流された瞬間、事態は爆発からもかなり経っていますので、その間は今思うと情報というのはしっかりと把握できていなかったと思います。

○質問者 テレビは秘書官室でごらんになられたのですか。

○寺田補佐官 私自身はまず秘書官室と連動するような形で付室というのがあるのですけれども、その付室と秘書官室でチャンネルを分け合って全チャンネルを見ている感じでしたので、最初は付の人間が日テレを見てくださいということで秘書官室に走ってきて、秘書官室で日テレをチェックした場合に爆発の映像だったので、執務室に入っていったと思います。

○質問者 補佐官御自身が執務室に。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 私が入って行ったと思います。

○質問者 そのとき総理もまたテレビを見られたのですか。

○寺田補佐官 総理自身はその映像ではないのをお付けになられていたかもしれませんが、どなたかと打ち合わせはしていました。どなたかというのは、恐らく福山さんとかそういうレベルの非常に近い人間と何か打ち合わせをされていたように思いますけれども、チャンネルを変えて、班目さんもその瞬間にいらっしゃったか、直ちに班目さんが呼ばれたかどうかですけれども、執務室で総理にはテレビをごらんになっていただきました。

○質問者 そこで総理の反応というのでしょうか、どういった。

○寺田補佐官 ぱっと見は落ち着いていました。別に内実も落ち着いていないわけではないですけれども、前の日、班目さんとかといろいろお話をしているときに、設計図、簡単なプラントの図を出して班目さんがいろいろ説明、保安院が説明しているときに、爆発の話はしていたのです。私の記憶だと、総理の方から爆発の危険性はないのかという話をしていました。そこは総理自身として特別水素爆発にこだわったわけではなくて、まずとにかく爆発の可能性はないかという話をして、班目さんが「ありません」と言って、総理の方から水素の話を出したと思うのです。水素爆発がないのかというときに、班目さんが「ありません」と。窒素充填の話までされていたかどうかわかりませんが、「ありません」という話をされて、総理はしつこく「ないのか」と、「存在していないのか」と2回ぐらい問いただしたら、班目さんが「どこか違うところにある」みたいなことを言い出して、「あるのではないか」みたいな話にはなっていたのです。だったら爆発の危険性はあるだろうみたいな話を11日に言っていたので、現実的に12日に爆発したときに、私は前々から。

○質問者 12日ですか。

○寺田補佐官 12日に。

○質問者 そうすると、今の話は11日ですか。

○寺田補佐官 11日の日に話している。いずれにせよ爆発の前に班目さんはないと言っていたのが起きたので、私としては、総理はどんと怒るだろうなという印象だったのが全く怒らなかったで、それが意外だなというのが印象には残っているのです。なので、落ち着いていました。これはどういうことなのか直ちに調べてくれと。何が重要なのかと。それは多分避難のことも含めて、何が起きているかわからない限りどうしたらいいのかわからないので、情報収集と考え得る今の段階での政府がしなければいけないことというのがどういうものがあるか考えてくれというのを長官ないしは班目さんの方にも話をされていたと思います。

さっき、飛び飛び話しているけれども、補足をすると、爆発の瞬間自体に班目さんがいたかどうか、長官がいたのかわかりませんが、かなり早い段階に爆発を見た瞬間に関係者を全部呼んでくれと言われたので、補充する形で関係者を全部呼んだ。その関係者というのは、長官、副長官。副長官というのは基本的に福山さんですけれども、班目さん、保安院だと思います。それはある種そういう何か起きたときのレギュラー。避難区域の策

【取扱い厳重注意】

定はそこに必ず危機管理監が入りますけれども、そういう形で呼んで先ほどのような話をした。

○質問者 細野補佐官であつたり。

○寺田補佐官 細野さんもいらっしゃいましたし、海江田さんもいらっしゃると思います。

○質問者 わかりました。その後、また少し時間が経って、夕方ぐらいからちよつとメディアにも出てきました海水注入の話というのが出てくるのですけれども、そういう議論の場に立ち会われたのか記憶はございますか。

○寺田補佐官 海水注入は、私は全く立ち入っていません。私は海水注入の話はかなり時間が経った後に、新聞記事や報道を通して話題になったときに非常に違和感を持ちました。やや横道にそれた話になっていくのですが、私が海水注入で違和感を持ったというのは、恐らく12日か11日なのかわかりませんが、東電の方と総理がお話をしているときに私も同席をしていて、東電側に政府に対して必要な物資及び行動、何が必要なのかということをちゃんと指示してくれと。それが何か簡単に紙にまとめるでもいいから出してくればその可否を直ちに判断するという話をして、東電が最初、では1日待ってくれとかと言っていたのですけれども、そんなのでは遅いからと言ってかなり早く出してもらったときにも私は同席したのですけれども、そのリスト自体は専門的な用語が並んでいたのによくわかっていないのですけれども、非常にクオリティの高い水の話があったのです。多分それは炉を冷やすのに一番適している水だという話で、ちょうど一緒にいた秘書官とかも薬とかに詳しい人間がいて、医療品とかでも使うようなクオリティの高い水だったらいいのですけれども、それを東電が言ってきたときに総理自身がこれは何だと、いわゆる冷やす水ですと。わかるけれども、この緊急事態のときに、つまるところ冷やせればいいのだらうと。それは真水だらうが海水だらうかとにかく今冷やさなければいけないのだから冷やせればいいのだらうと。なんで危機的な環境とかそういうことを加味せずに一般論的なものを出してくるのだということに対する、かなり強く不満を示されたのです。

なので、総理自身の頭の中に海水注入を躊躇するような、一般論としては別ですけれども、あの環境において否定されるような素地はないなとずっと思っていたので、後の新聞報道やテレビで海水を総理が止めたと聞いたときには非常に強い違和感を持ったというのはあります。海水に関しては、私はもうそれぐらいしか総理が何を考えているのかというのはわかりません。

○質問者 そのとき東電の方は、クオリティの高い水というのは真水とかですか。

○寺田補佐官 真水よりいい水らしいんです。わからないですけれども。

○質問者 それに対して東電の方は何か答えられていたのですか。こんな時期にこんなことを言っているかという話をされたときに。

○寺田補佐官 それは「はあ」みたいな感じでした。

○質問者 特に説明、こういう理由でこういうのが必要なのですという説明はされていたのですか。



【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 多少されたかもしれませんが、技術的な話というか、専門的な話はされたかもしれませんが、今、総理が思われているのは、とにかく一刻も早く冷やし続けることが必要だというときに、大量に必要なということにはわかっていたので、それは現実的なものではないだろうという話をされていたと思います。

○質問者 わかりました。

○質問者 純水をつくっている栗田工業とか幾つかメーカーがありますね。そういう純度の高い水を、そんなものを調達していたらとても間に合わないし。

○寺田補佐官 間に合わないという話だったのだと思います。非常に不満を示されていました。

○質問者 逆に言うと、そのときの話が翌日といいますか、12日の海水注入のときの海水注入で本当に大丈夫なのかというような話につながっていくのでしょうか。

○寺田補佐官 つながっているかどうか、私は両方の会議に出ていませんので感触も含めてないのですが、つながるとしたら総理が躊躇しているというような伝わり方はしないと思うのです。私が持った印象と同じですけれども。なので、私はかなり海水注入の話自体が非常に報道の背景を丹念に調べると、政治的な自民党の某代議士が絡まれているとか、その方から直接電話が来てこれを書けとかと言われてたとかという記者たちがいっぱいいましたので、そういうようなたぐいだというのは非常に強く思ったのです。

もともと電話をかけるようなことをしない代議士がかけてだれだれに聞けど、それが全部知っているからみたいな話でその話をあえて伝搬させようとしていたのがあって、私の方に問い合わせがいっぱい来ましたので、ややかなり政治的にこの話題というのは使われているのだなという思いもあったので、正直その後には再臨界の話が実はその場であったかどうかと聞いて、多少私もそういうこともあったのだと思いましたがけれども、私は違和感が強いことがありました。基本的にはその会議にタッチしていないのでわからないということです。

○質問者 わかりました。当時、その会議のみならず政府全体として原子炉に注水をしないといけないというような議論があったと思うのですけれども、そういった一般的な話として補佐官はそういった御認識はございましたか。

○寺田補佐官 そういったというのは。

○質問者 注水が必要である、早くやらなければならないということですか。

○寺田補佐官 それは総理自身が一番そういうような思いが強かったので、注水を必ずととにかく水を入れて冷やし続けること以外にないということに対する意識は、当初、私は仕組みはわからなかったですけれども、総理が非常に強く言われているので、そこはどの、1号、2号とかにかかわらず、すべての危険要因に対してそんなような措置がとれるように用意しておけという話がありました。

○質問者 当時、ちょっと細かい話になるのですけれども、その議論が行われるのが執務室で開始されるのが夕方6時くらいからなのですか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 その執務室でというのは海水。

○質問者 海水注入について。その前の段階で海江田大臣が保安院の権限を持って東電に対して海水を注入するよという指示をされていたそうなのですが、そういった話というのは。

○寺田補佐官 私は記憶はないですね。もしそういう話のときに立ち会っているのかもしれませんが、特別印象に残るような流れではなかったので記憶していないのかもしれませんが。

○質問者 わかりました。その海水注入に関する官邸5階執務室での議論が夕方6時ぐらいから8時ぐらいまで続くのですけれども、その間というのはどういったことをされていきましたか。

○寺田補佐官 私は何をやっていたのかはわかりません。後ほどお話をされるのかわかりませんが、執務室の隣の応接室が原子力対応のある種臨時の本部みたいになり始めるのが12か13ぐらいだと思います。総理の御指示によってとにかくホワイトボードにすべてのリスク案件を書く。そのリスク案件がどう進んでいるかということをチェックしてくれという話があって、なかなか進まなかったのです。とにかく東電の方々が1号機が危なくなると1号機のことだけ書いているのに、まだないのか、まだないのか、あれもあるだろうと言って、4号のプールの存在が発覚したりとか、さまざまそういう形でどんどん2Fまで議論が上がっていくのですけれども、そういうのが同時にその瞬間からあったとしたらそちら側にいたかもしれないですし、秘書官室にいたかもしれないですね。

○質問者 そうしますと、応接室での議論にも補佐官御自身が出席されると。

○寺田補佐官 応接室で行われていることに関しては、15日の統合本部ができるまではほとんどいると思います。

○質問者 いらっしやった。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 そこにはどういった方が、海江田大臣とか。

○寺田補佐官 枝野長官、福山、海江田、細野、寺田ぐらいまでがバッチ組として常駐するような人間でした。あとは安全委員会、班目さんのときもあれば委員長代理の方も。

○質問者 久木田先生。

○寺田補佐官 久木田さん。うちは通称博士と呼んでいますが、博士がいるのと、保安院が13日ぐらいからはもう安井さんが完全確定していましたので安井さんがいらっしやった。あとはもうそれぞれ安全委員会、保安院の事務、その下のサポートの人間や何やらが入って、時には政務だけであったり、時には安全委員会、保安院も交えてということでした。東電の人間も勿論いました。

○質問者 聞いた話では、この応接室において13日ぐらいから2時間ごととか3時間ごとに1回ぐらい会議をして、宿題を持ち帰るような形で事務方がまた下りて、また再度会議が開かれる、そういう感じで。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 宿題を持って帰るとというのが今例示されるのがメインになるような感じではないですね。どのように動いているのかということをお電ないしは保安院から聞いて、それを安全委員会の人間や政務の人間が情報共有をするということに近かったです。先ほどの2時間とか3時間というのは、炉の状態のパラメータ自体をちゃんと定期的にチェックしようというので定期的にやっていたと思います。

○質問者 そういう定期的なものにも基本的には補佐官がいらっしゃったと。

○寺田補佐官 私はおりました。

○質問者 わかりました。ちょっと話が戻ってしまって恐縮なのですが、海水注入に関する議論が12日夕方に行われているぐらいのタイミングで避難の話も出てくるのですけれども。

○質問者 (4)ですね。

○質問者 この辺りの御議論については、御記憶はございますか。

○寺田補佐官 その後も1回、2回とありますから記憶が混同しているかもしれないのであれですけれども、私が思っている印象は、避難区域を決める、拡大するとか云々のときには、かなりデリケートな問題として人間の管理、その会議体の管理というのをしていた印象があります。

必ず伊藤危機管理監は入れないと避難区域の話はできないみたいな雰囲気があったので、必ず伊藤危機管理監と、あと西川官房副長官補も多分そういうペアだったと思います。それと総理が非常に安全委員会からたてつけとして、そういう場合は安全委員会に聞いてその返答を待って政府で決断するという仕組みを尊重されていたので、安全委員会で班目さんが主ですけれども、そういう方々からの助言を受けて動くというのになっていたと思います。基本的には福山さんと枝野さんが一時的な調整やら何やらをした上で総理が御判断。総理の前で御説明して御判断いただくというようなたてつけになっていたというのは5階で避難区域を決めるときの決まりごとではないのですけれども、1つの慣習といいたいかもしれませんが、そこには私も参加しました。

○質問者 これは3月12日になってからですね。前日の3月11日のときとかには補佐官も参加されていないのですか。

○寺田補佐官 日付で分けるというよりも、5階で決めるときには私も同席していましたので、5階に決めているときには私もその場にいた。その場にはそういうような形。

○質問者 3月11日の最初の3kmのときも検討は5階でやっていたというような話があって、細野補佐官ですとか枝野さん、福山さんという中で、細野補佐官のヒアリングのときに、寺田補佐官もいたかもしれないというような話があったのですけれども、明確に覚えてはいらっしゃらないですか。

○寺田補佐官 これはいいですね。絶対ないという確証も私はないです。この当時、本当に5階と地下に下りる、下りないのどちらかあいまいな辺りなので、5階にいたか確証は持てないですね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 例えば(4)の第二原発から10kmの避難指示というのが12日の5時39分に出ているのですが、2Fから10kmというのが出た経緯とか理由というのを覚えてらっしゃるとかということはありませんか。

○寺田補佐官 このことだけに限ってではなくて、避難の話をしているときの話は先ほど申し上げたとおりと、これは後になるのか、アメリカが言わば80kmだ何だという話をしていたり、この12日の17時はもう爆発の後だとは思いますが、私が覚えているのは、政治側の方が非常にアメリカがそういうようなもっと広い区域にやっているということも踏まえて、拡大する必要はないのかというような懸念を持っていました。

それに対して、班目さんと恐らく先ほどの博士だと思いますが、どんなことがあったって20km以上は必要はないということはかなり自信を持って言われていたと思うので、正直、班目さんがお話をされることに関しては、もう前日ぐらいからちょっと政治側の人間がこの方の言うことはやや怖いとか、完全に信頼できないのではないのかというのはあったのですが、久木田さんがお話をされているから大丈夫なんだろうなというような雰囲気がありました。

○質問者 それと、前に戻るのですが、1Fに視察に行かれた際に、1Fでオフサイトセンターに詰めていた国の事務方が合流して、総理に2Fの緊急事態宣言等の決裁ということで御説明されているようなのですが、それは覚えはありますか。

○寺田補佐官 当該その案件かどうかは別として、お話が終わって部屋を出られる前にどなたかが寄ってきて、それはその方だったので、何かサインを求めているなどというのはありました。総理がこれは何なのだという話をされているのは見ていました。ただ、内容自体に関しては、私は把握していません。

○質問者 それは大体短時間で終わったような印象ですか。

○寺田補佐官 非常に短時間だったと思います。部屋自体にいるときも、医務官の方から余りこの場に長くいることに関してはお勧めできないという話を警察の秘書官を通して私の方に入りまして、勿論、全般的に長居できないような形でしたので、かなり迅速に部屋を出ようとしている最中でありましたので、余り座って説明をゆっくり受けるような環境ではなかったと記憶しています。

○質問者 先ほどのお話で、避難区域を決めるときには大体総理は危機管理監とかそういう事務方の人も呼ぶようにしていたということなのですが、総理が危機管理監等を呼ぶべきだと総理自らの発想でされていたのか、だれかがそういう助言をしていたのかというのをおわかりになりますか。

○寺田補佐官 先ほども申し上げた避難区域をどうするという話に関して、基本的に長官の方、福山さん含めてそちら側でやっていた上で総理に御説明ということなので、もうその前段階のところで危機管理監を含めて、長官のところに入っていたので、総理に御説明するときに当然同席するというのは、余りだれかから言われたこともなかったし、どれぐらい広げたらいいかということは安全委員会の方々の助言ですけれども、広げる場合に人

【取扱い厳重注意】

口がどれぐらいいて、どれぐらいのマンパワーが避難させるときに必要なのかという実務的なことに関しては危機管理監がお答えするという役割分担に近かったです。

○質問者 わかりました。ありがとうございます。

○質問者 済みません、ちょっといいですか。この手順的なことなのですが、避難の範囲を決めたときに、先ほど枝野長官と福山官房副長官の中でいろいろ議論されて、事務局サイドといいますか役所の人間等も詰められて、そこである程度決まったら、それから総理のところへ執務室に説明に行って決裁をいただくという流れになるのでしょうか。

○寺田補佐官 その間の間隔自体が悠長なものではなかったと、いきなり総理のところへ全員集まってその場で一から始めて議論という雰囲気ではなかったです。ある程度の安全委員会の方々がどう考えているかということも福山さんとか枝野さんのところまで含めてなのか、多少は整理した上で最終的に総理のところへ御説明という形だったと思います。

なので、避難区域の策定に関しては、先ほど申し上げたデリケートな範囲で、避難区域の話らしいと、今、総理のところへ案件として上がってくるのはというので寺田さんも入ってくれという話で私が呼ばれて入るみたいな、呼ばれてというか、私も同席しますと言って同席しているというのがありましたので。

○質問者 寺田先生が同席されるのは、最初の下。

○寺田補佐官 下のときには入らないです。総理のところへ。

○質問者 行くときということですか。

○寺田補佐官 今、長官が来るとかという話で大体。突然入るときも山ほどありましたけれども、その話で入ると。伊藤危機管理監を呼べというのは、多分警察の秘書官が呼ぶ形になると思うので。

○質問者 そうしますと、最初のいろいろ検討する作業というのはどこでやっていたかというの。

○寺田補佐官 長官室か、そこが一段階本当に実務的に福山さんのところでやって長官の決裁を受けて総理という順番なのか、そこは。

○質問者 直接入られているわけではないからわからないですね。

○寺田補佐官 わからないですね。ただ、必ず長官と副長官、福山さんが一緒に。

○質問者 そうしますと、総理のところへ入られるときに、伊藤危機管理監を呼んでくれとか、西山官房副長官をとという話になるということは、つまり、それまでは伊藤さんとかは一緒には入られていないということなのでしょうか。

○寺田補佐官 それまではどうなのかわかりません。そこは枝野さんと福山さんしかわかりませんが、勿論、避難区域の話というのは、ではここから避難区域の話をしてしまおうという話をする場合も勿論ありましたけれども、何かしら伊藤さんと呼んで聞くということもあったとは思いますが。なのでそこら辺はちょっと私のレベルではわかりません。

○質問者 それで総理に御説明しようというときには、その説明は総理の執務室ですか。それとも横の応接室。

【取扱い嚴重注意】

○寺田補佐官 執務室です。

○質問者 わかりました。11個の質問事項の中での(1)(2)(3)というところは、ここは特に(3)は入られていないのでしょうかけれども、(1)(2)というのはそういうやり方でやっていたかどうかというのは余り関与されていないので。

○寺田補佐官 わからないですね。

○質問者 しかし、今、説明いただいた話というのは、(1)(2)のときのやり方であった可能性もあり得ますか。

○寺田補佐官 可能性の話で言うと否定はできないと思います。私が入ったであろう(4)(5)(6)は必ずそういう形でやっていたので、私の印象としてはそういうふうな1つのルールがあると思っていました。

○質問者 わかりました。(5)のときなのですからけれども、これは総理、執務室の横の応接室、そこでまずはいろいろ議論があって、どうも今まで我々が聞いている話を総合しますと、どうも海水注入の話と一体となって(5)の議論というのがあったらしくて、海水注入するのは大丈夫なのか、大丈夫でないのか、再臨界はどうか、再臨界が危ない可能性があるのだったら避難していいのかという流れの中で一体となって話が出てきているようなのですが、そういう流れだったとすると、何か御記憶の中でその流れはそういえばあったかなというようなことはどうでしょうか。

○寺田補佐官 先ほど申し上げたとおり、海水注入自体の議論があったこと自体私はわかりませんので、そのことと連動して避難区域の話があったかどうかということはわかりません。

それと応接室、そういうニュアンスで言われたのとは違うのかもしれませんが、応接室で避難区域を本格的に議論するとかというのは多分しないと思います。応接室自体は非常にいろんな方が出入りするもので、こういうデリケートな話は多分そこではよほど入ってはだめという整理をしないとできないので、やるとしてもそのときに海水注入にだれが入っていたか十分私はわかっていませんけれども、長官室とか副長官室とかちゃんと、応接室は非常に出入りが激しいところだったので、それ以外のところでやるとしたらやられていたと思います。

○質問者 そうしますと、(4)(5)なのですからけれども、このときは長官室で話があったかどうかというのはわかりませんか。

○寺田補佐官 わかりません。

○質問者 総理室に入られるときには、寺田先生も一緒に。

○寺田補佐官 私は避難の話をしているときにはいたと思います。3から10ですか。いずれにしても拡大するときにはどれぐらいの方がいるのかという話のときに非常に大きな人数の方がいらっしやって、最初の避難のときにさまざま現場の方々がこういうような苦労があったとかといった記憶があるので、こういうときにはいたと思います。

○質問者 最初のという話が出てくるということは、つまり拡大のときだということですか。

【取扱い厳重注意】

か。

○寺田補佐官 拡大のとき。

○質問者 そういう席で、なぜ 10km でなぜ 20km とかという根拠についての議論はなかったですか。

○寺田補佐官 安全委員会の方々からの明確にどのようなことが想定できるから、その場合は何 km というような話ではなくて、先ほど申し上げたとおり、どのタイミングかは別として、20以上に広げなくていいのかというか、アメリカぐらい広げなくていいのかという話のときには、いや 20 で十分だという話はチェルノブイリの話とかもいろいろ織り交ぜながら安全委員会の方が言っていた記憶はあります。それ以外の何 km に関しては、明確な理由を持って何 km という話を安全委員会の方々が行っていた記憶はないですけれども、安全委員会の方々は今言ったようにそのぐらいの距離で大丈夫という話をされているのは記憶があります。

とかく総理は自分から km 数をお話をするというのを避けている印象がありました。こういう場で話すのがいいかどうかあれですけれども、非常に総理としては、それは法律のたてつけというか、助言を受けるということに忠実であろうという気持ちもあることは十分わかるのですが、どこか自分自身で決めたくないというような雰囲気があるなどいうのを近くにいた人間として違和感を持って見ていたので、とにかくそれはちゃんと安全委員会が言っていることということに気にされていました。

その後、これ以外のときに 20 から 30 とか何とかというのを小佐古さん含めてがっつと、安全委員会が一応いろいろ考えていることに対して参与の小佐古さんがいろいろ話しかけるということはあったのですけれども、そのときに総理の方からそれは一応政府として法律のたてつけ上安全委員会からの助言を受けるということになっているのだからという理由で、安全委員会の言っていることを支持しようとするときがありましたので、基本的には一貫して自分からというよりは安全委員会の方々が出てくる。安全委員会が出てくることの km 数で理屈として合ったのは、先ほど申し上げたとおり 20km 以上は必要がないというときの理屈ぐらいしか私は聞いた記憶がないです。

○質問者 わかりました。実はその 20km 以上は必要ないという議論は、(6) の 20 から 30 を屋内退避にとどめるときに議論としては出ていまして、30 に広げる必要がないかという議論で、もうそれは必要ないというのが結構安全委員会から出ているのですけれども、寺田先生が聞かれたのはそのときの議論ではないでしょうか。

○寺田補佐官 厳密には分けられないですけれども、もう今すぐにでも爆発するのではないかな、爆発的なものから来る避難区域の拡大的な発想と、ある種まだこの 15 日も朝の段階で爆発していますからあれですけれども、そのときに話したニュアンスとは違って、アメリカの 80km が出たのはいつぐらいだったのでしょうか。そこら辺は私の中での時系列があれなのです。政治側の方は。

○質問者 それとセットなのですね。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 セットかどうか分からないですけども、そこで待機していたときもあります。その前の段階でも、20km は必要ないと単純に言っていたときもあるかもしれません。

○質問者 3月16日です。

○寺田補佐官 それより前からも多分。

○質問者 13日と14日のときにも、20kmの話がすでに出ているのですが、これを30に拡大すべきではないかというような検討はどうもしているようなので、恐らくそのときの話なのかなとは思っています。

○寺田補佐官 km 数的な理由を出されたのはそのときぐらいしか記憶がないですね。あとはある種3から10と広がっていくことに関して、一日一日環境が悪化していっているの、そこら辺に対して政治側の避難区域はこれぐらいで大丈夫かという危機感というのはあったと思います。

○質問者 そうすると、寺田先生の御記憶としては、(6)は15日で爆発事象は一応すべて終わってしまった後の話なのですけども、そういう爆発事象が起きる前というか、まだ起きつつあるような状況でそういう議論をしている記憶があるということですか。

○寺田補佐官 避難区域の拡大に関しては、爆発という事象が起きた後にぐっと話が急に進み始めるという雰囲気がありました。勿論、爆発をどこまで予見できていたかという話になりますけれども、やはり一番最初の爆発に関しては班目さんがかなり強くないとして言っていたので、予見はみんなが頭の片隅にはあり得るとは思っていたと思いますけれども、しっかり予見した上でしゃべっている感じはなかったです。

その以降は、今後また同じことが起きるかもしれないという話はあるけれども、急拡大はできないだろうみたいな話も多分あったのだと思います。

○質問者 わかりました。

○質問者 その避難の決定のところでは1点だけもし御記憶があればなのですけども、この質問事項の(4)(5)というのは先ほどおっしゃったお話ですと、総理のところには官房長官室で一旦協議したものを持ち込んで決裁を得るような形だったということなのですが、(5)の場合というのは、官房長官とかと一緒に入っていたような感じだったのでしょうか。

○寺田補佐官 だれがですか。

○質問者 補佐官がです。

○寺田補佐官 先ほど申し上げたように、どのケースに私がどのような形で入ったかは記憶があいまいなのであれなのですが、何度かあるうちに長官が入られる、福山さんも入られると、避難区域の話だということで、それと一緒に秘書官室にいた私が入るということはありませんでした。そのケースがこれのどれに当たるかというのはわかりません。

○質問者 わかりました。

○質問者 何度ぐらい入られた御記憶がございますか。



【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 避難区域の関係ですか。

○質問者 はい。今、なされていたロジでまずは議論して危機管理監の。

○寺田補佐官 わからないです。

○質問者 わかりました。

○質問者 先ほど人口はどれぐらいという話が出ましたけれども、避難区域を設定して、それだけの人口をどう移動させるとか、ちゃんとできるのかとか、そういう議論は全然しませんでしたか。

○寺田補佐官 それはしました。

○質問者 どんな形で。

○寺田補佐官 同心円状でやっていましたので、広げた場合、それは何 km から何 km のときかというのは記憶がないですけれども、広げた場合には人口がどれぐらいだということを伊藤危機管理監の方からお話があって、彼らの言い方ですと病院が何個あって、その移設先がどうあってと、どれぐらいかかる。時間的な軸みたいなのを言ってきました。そこら辺も班目さんだったか、大体どれぐらいがいいということをオーソライズする方を含めた上で一緒に話していた記憶があります。

○質問者 避難の話から戻るのですけれども、その後、3月14日の午前11時過ぎに3号機がまた爆発をしたのですけれども、その際というのはどういった形でこの爆発を知られたとか。

○寺田補佐官 かなり1号機のとくと似ていて、私は秘書官室にいました。たしか総理が山口公明党代表と執務室でお話をされていたのだと思います。これもまたチャンネルを分けていたので、秘書官室のチャンネルだったかわかりませんが、また爆発の映像が入ったので、すぐ総理にお伝えしなければと思って入っていきこうとしたときに、今、山口さんとある種公明党の代表と総理がお話ししているというかなりタッチなシチュエーションだったので、でも公明党さんはどなたかいたかな。ただ、これはこういう事情が出ているので、それは勝手にどんどん入って行ってテレビを付けてごらんになっていただいた記憶があります。

○質問者 そのときの総理の御判断というのは御記憶はございますか。

○寺田補佐官 爆発の映像自体が1号機に比べてかなり縦に長かったのと、総理が色が黒いのに御注目されて、「これは黒いよな」と言ったのだけは印象的に残っています。

それが山口さんといらっしゃったときに言ったのか、山口さんがその映像を見てすぐお出になられたと思うので、その後改めて長官やら何やら入っていただいて言ったときに「黒いよな」と言ったのかわかりませんが、また1号機と同じように関係者を集めてと言われて、長官やら班目さんやら保安院やらが集まったというのはあります。

○質問者 わかりました。その爆発を受けて何か特別総理から御指示が出たとか。

○寺田補佐官 1号機と一緒にです。これは何が起きているのかということの話をしたと思います。

## 【取扱い厳重注意】

○質問者 わかりました。その次の質問事項に移るのですが、その後、政府と東電の統合対策本部というのが3月14日の夜ぐらいから話が出てきて、最終的に15日の朝に立ち上がるのですが、この設置の経緯については御記憶はございますか。

○寺田補佐官 14の夕方くらいからですが、ちょっと正確な時間は覚えていないのですが、私が長官室にふらっとというわけではないけれども、ちょうどいろんなところが直ちに何かしなければいけないというタイミングはなかったもので、長官の御様子をうかがいに部屋に入ったら、海江田大臣と長官がお二人いらっしゃったのです。それでは、まずいなと思って出ようと思ったら、「寺田君、入っていいよ」と言われたので、入っていたのです。

いろいろなそのときの状況をお話ししているときに海江田大臣の秘書官が入ってこられて、だれだと聞いたのかわかりませんが、海江田大臣に東電からお電話ですと言われて、珍しく海江田大臣が「そんなのいいよ」と強い口調で言われたのです。「断ったからいいよ」と話をされたのです。私も差し出がましかったのですが、「何かあったのですか」と話を聞いたら、東電が撤退したいと言っているのだという話をしたときに、長官が「私にも来たよ」という言い方をしたのです。ちょっとただ事ではないなという雰囲気があったので、海江田大臣には「僭越ですが、そのような大事なお電話であれば、ちゃんとお出になってしっかりとお答えになられた方がいいのではないですか」という話を申し上げたら、大臣が「そうだな」と言ってお出になられたのです。それで長官と話をすることになっているのですかという話をしていました。

その後、一連も含めて東電側はこの問題に関しては報道でいろいろどちらの両論も言われているのであれですが、もうなすべきことがないという東電側の主張だと、だから撤退させてくれというニュアンスだったので、その後、応接室にいつも集まっていたのですが、安全委員会の人間も保安院の人間もまだやれるべきことはあるかという議題でしゃべっているのです。なので、東電が言っている、必要な人間は残すけれども、それ以外の人間は帰すというようなニュアンスでは決してなくて、海江田大臣も長官も含めて、やはり基本的には撤退させてほしいという話になっていたと思います。

いつごろ海江田大臣が私の目の前でお電話を取られたのかわからないですが、私自身としての記憶があるのは、そのときはもうNHKとかずっとオンタイムで2号機の燃料棒が出続けているというのを記者会見を東電はずっとやっているのです。ある瞬間に8時何分ぐらいに武藤副社長が会見を行いますというのがセットされて報道に流されたのです。その海江田さんと長官にかかっている電話とそれが私の頭の中では、これはもしかしたら政府がうんと言ったら、ある種今まで広報の人間がしゃべっているのに急に言わばえらい責任者が出てきてしゃべるといふことは何か重大な発言をするのではないかという恐怖感を持った記憶があるので、武藤副社長の会見のセット時間より前に多分私は撤退の電話を聞いていると思うのです。

大変なことだなと、その日の朝だったか、2号機のベントをして注水しなければいけな

## 【取扱い厳重注意】

いという話になっていたのですが、その前の日から東電側は2号機もベントが必要になりますということは言っていたのです。

ちょっと横道にそれですけれども、そのときに細野さんも私もその説明を聞いていたときに、素人考えで申し訳ないけれども、1号機はベントできると言ってなかなかできなかったのではないかと。もうベントが必要だとわかっているのだったら、恥ずかしい発想ですけども、どうせ後でやるのだったら竹竿でもいいから何か刺して開けておけばいいではないかみたいなことを言っていたときに、絶対にベントはできます、技術的に理屈はありましたけれども、もしできなくてもベント弁は何個もあるのだから絶対大丈夫ですと説得されて、そうなのかと行って14日に入って、やはりベントができてなくて水が入らなくて燃料棒がむき出しになっているという話だったので、いよいよ全然統治能力がないというので、5階の応接室全体として、ちょっとこれはただ事ではないなど、しかも東電が撤退したいと言ってきているというのがありました。

私は初めてですけれども、経産次官の松永さんが5階をややうろうろし始めたのです。それを海江田さんが、松永まで来てあれも同じことを言いに来ているのではないかみたいなことで、ややギクシャクし始めたのです。8時の武藤副社長の会見自体は、多分何も大した話はなく、広報で言っていたことを改めて言って終わったのです。その後、炉の状態は今後どうなるのかということを経産次官、海江田大臣、福山副長官、私、細野さん、安全委員会は班目さんともう一人ぐらい久木田さんだと思いますけれども、あとは安井さんぐらいで応接室ですと話をしていました。

彼らが一般的に言うのは、今はまだやるべきことはあるけれども、何度もこれと同じサイクル、結局ベントが弁を開いて蒸気を逃がして水を入れて、またベント弁が閉まってという言い方をしたと思いますけれども、閉まって圧力が高まってまたベントして水を入れてというサイクルがいつか破綻する可能性があるという、今はまだやるべきことはある、撤退しなくてもいいけれども、いつか何かこのサイクルが金属疲労でもないですけれども、できなくなる瞬間が来る可能性が高いというのが大体の専門家たちの話の総合だったので、これは今撤退すべきではないと思うけれども、こういう流れが続く以上、明言はしていませんけれども、ある程度撤退を了解するとも思っていますけれども、ぼんやりとどこかで手の打ちどころがないときになった瞬間に政府としてどう行動するのだということを決めておかないといけないよねという話である程度話を整理した上で、総理を呼んで御判断いただくという話の流れになりました。

ある種、ほとんどずっとダウンスケールと言って計器が壊れていて今炉の状態がどうなっているかわからないという状態だったのですが、それでも定期的に書類で炉の状態を示す紙が散乱していた応接室を全部片づけて、藤井副長官とかも何か大事な判断をするときには同席させてくれということだったので、総理を交えてやる会議を3時過ぎぐらいにやっとな。

○質問者 場所は応接室ですか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 片づけて応接室でやりました。総理と長官と海江田大臣と松本防災大臣と3長官、3補佐官、安全委員会は班目さんともう一人、保安院が安井さんともう一人くらいいたと思いますけれども、そういうメンバーで、勿論、東電は抜いた上で会議体をセットして総理をお招きして長官から御説明をしたと。

長官自体としては、非常に饒舌で説明が上手な方なのですけれども、そのときだけはややちょっと、一言で言うと今は撤退しないけれども、撤退は断りましたけれども、いつになったらそういうデッドラインはあるのでしょうかというニュアンスで、いつどんな状態になったら撤退はあり得るのかというニュアンスをしたときに、総理がかなり強い口調です。「もうそんなのはあり得ないのだ」という話をして、保安院と安全委員会の一人ひとりに対してまだやることはあるよなという話を議論していました。

全員がまだそれまではいつまでもやり続ける、いつか危ないことになるのではないかと弱気だったのですけれども、総理からかなり強く言われたもので撤退はないと、まだやるべきことはありますと全員が言ったので、そうなんだ、絶対やることはあるのだと言って清水を呼べという話につながって、私も突飛な話だという印象がないので、総理は前々から情報を政府として全面的にバックアップできていないというか、東電と一体化できていないから、あちらに本部をつくるぐらいでないだめだと前から言っていた節は記憶があるのですけれども、東電の清水を呼んで統合本部をつくるという話をその場でされて、言わば私たちは御前会議と呼んでいましたけれども、その会議が解散して政治組、バッチ組の人間だけ、あと瀧野副長官だけ事務方に入って執務室の方に移りました。それで清水さんを待っていたというのが流れです。

まだそのままずっとしゃべっても大丈夫ですか。

○質問者 はい。よろしく申し上げます。

○寺田補佐官 清水さんが執務室の前まで来たという連絡を受けて私が迎えに行って、3人で来られているということだったので、3人全員でもいいですかと総理に伺っていいよと言われたので清水さんを迎えに行った。清水さんは1人でいいということだったので、お付きの方2人を別室に置いて1人で入られた。

ほぼそこでは撤退云々ではなくて統合本部をつくるという話を総理から一方的にされました。私自身は非常に法律的なたてつけはどうなっているかとか物すごい気になっていましたから、とにかく合意はちゃんと得た上でやらなければいけないというので、総理が一方的に話されて、清水さんはちょっとあいまいな返事だったのですけれども、最後に清水さんに私の方から「合意の上でということですのでよろしいですね」と言ったら、よろしいですという話になったので、何分後に行くからという話で準備してと。細野を付けるからと細野さんに清水さんにずっと東電まで付いていけということで、恐らく清水さんと細野さんがそのまま車に乗っていくと。お付きの方2人を完全に残したまま清水さんだけ帰ってしまって、それまでの間に官邸側として記者会見を何時に開いて、長官は何を言うか、総理が下のぶら下がりでも何を言うかというのを整理して東電に向かうというのが一連の流れ

【取扱い厳重注意】

です。

○質問者 わかりました。幾つか細かい点なのですが、最初、さかのぼって東電から海江田大臣のところに電話がかかっていると。補佐官の方からそういう電話であれば出られた方がいいのではないかとと言われて、海江田大臣が席を離されて、官房長官から状況について説明を受けたということだったのですけれども、具体的に官房長官から東電がどういふことを言っていてどういふやりとりがあつてといふのは。

○寺田補佐官 もうなすべきことがないから撤退をしたいと言つてきているのだといふニュアンスでした。だから、直ちにそれはだめだと言つたといふのは長官から聞きました。

○質問者 わかりました。その後、総理のところに皆さん集まつて。

○寺田補佐官 総理の応接室に集まつたのです。

○質問者 済みません。応接室に集まつて官房長官から状況を説明したといふことだったので、官房長官の説明ぶりといふのは今はもう既に断つたといふこと。

○寺田補佐官 勿論、ちやんと言つた上で。

○質問者 言つた上で総理に説明をされたと。

○寺田補佐官 どういふ言葉遣いをしたかまで厳密に覚えていないのですけれども、とはいへ状況は好転していないので、どのタイミングになったら白旗とは言わないのですけれども、いろいろ考えなければいけないのではないですかといふニュアンスに近いです。

○質問者 そうしますと、その後、清水社長を呼ぶといふ判断と、今すぐに東電が撤退するわけではないといふ説明があるにもかかわらず、総理は清水社長を今すぐ呼べとおつしやつたといふことでしょうか。

○寺田補佐官 そうですね。今の問い自体が何と答えていいかわからないのですけれども、総理自身にしてみると、撤退といふ発想自体は何があつてもない。こういう状況を迎えてこれから対応をしていく上では、もう官邸にいて東電から一方的に電話を待つとかといふことをやつていてもだめなのだから、現場に行かなければいけないといふ発想に移つていた。なので、清水を呼べといふ話になりました。

○質問者 わかりました。枝野長官を含め、総理に説明をされていた方々といふのは、撤退イコール全員がいなくなるというようなニュアンスで説明をされていたのですか。

○寺田補佐官 なので、海江田大臣も長官も含めて強く否定されたのだと思います。

○質問者 総理もそういう認識でお話を受けられてと。

○寺田補佐官 そういうような認識で受けられていると思いますし、そのとき、どのタイミングかわかりませんが、吉田所長に細野さんが電話しているはずなのです。吉田所長に「まだやるべきことはあるか」といふ話をして、吉田所長が「まだまだあります」と。多分武器がないとかそういうような話は言われていたかもしれませんが、吉田所長からのそういう答えを受けて、現場の人間もまだやれるといふことはあると言つていふのではないかといふことは、総理は言われていたと思います。

○質問者 わかりました。このやりとり、一連の流れの中で、一部新聞報道等にあるので

【取扱い厳重注意】

すけれども、清水社長を呼ぶに当たって、福山副長官と寺田補佐官が事前に清水社長に連絡を入れておいた方がいいのではないかというやりとりがあったと書かれているのですけれども、そういったことというのはございますか。

○寺田補佐官 記憶にないのです。それは実際、福山さんが記憶していて、私もそれを言われたのですけれども、多分、清水さんが玄関まで来て部屋の奥のところまで連れて行くまでの間に私に言うておいた方がいいのではないかといって、私は前向きな話をしたみたいですが、余り記憶はないですね。実際として、座ってから余り撤退の是非という議論ではなくて統合本部の話から入りましたので。

○質問者 そうしますと、迎えに行かれて上がってくるまでの間に何かやりとりをされた御記憶というのはありますか。

○寺田補佐官 私が迎えに行ったのは、官邸の5階の執務室のドアの前までです。

○質問者 わかりました。その後、清水社長と総理が話をされて立ち上げが決まったのですけれども、寺田補佐官御自身は本部に行くとか何か役割を担うとか、そういうものはどうでしょうか。

○寺田補佐官 一緒に総理が行かれるときには付いていくという話になりましたので、私はそのときサンダル、シャツでユニクロのフリースを着てみたいな格好だったので急いで着替えて、かつ下で総理がお話しする内容を整理していた。すぐ行こうとしたのですけれども、急な話だったので、総理専用の車がなかなか手配がつかない、ドライバーがつかないので、ちょっと予定していたより時間が過ぎたかなというぐらいでした。とにかくそういうロジ的なことを含めてばたばたしていました。

○質問者 わかりました。統合本部では総理御自身が本部長で、海江田大臣が副本部長で、事務局長に細野補佐官という役割分担の話がいつごろだれから出てきたのかというのは記憶ございますか。

○寺田補佐官 恐らくそれは総理を入れて話さないといけないことなので、記憶というよりはその間の中での物理的な話で行くと、御前会議の応接室が終わって、バッチ組と瀧野さんだけが総理執務室に移ってその場で話している中で大体の概略を決めるぐらいしかないのかなと。もう清水さんと細野さんが一緒に出て行ってしまいますので、細野さん抜きで話をするか、もう清水さんが出られてからもう何十分とかという1時間レベルぐらいの間で東電に行くという話になっていましたので、その前の段階でお話しているのかと思います。多分清水さんがいる中でお話を改めてしていると思います。私が本部長で彼が何とかというような話。

○質問者 わかりました。その後、総理とほぼ同じぐらいのタイミングで東電には補佐官も行かれたのですか。

○寺田補佐官 私は総理と同じ車にそのときに乗っていました。

○質問者 そのときに総理とお話はされたとか記憶はございますか。

○寺田補佐官 お恥ずかしい話なのですが、総理自身がそのときに本当に線量が最後まで

## 【取扱い厳重注意】

上がっているときには、最後、自分はその現場に行って、現場とはどこまでの現場かわかりませんが、陣頭指揮を執ることをせねばいけないだろうという覚悟を持たれていました。

統合本部をつくる時も、その後の爆発の前とはいえ深刻な状態だったので、近いタイミングでそういうことが起こり得るのではないかというのはみんな思っていたのですけれども、総理から 11 日の夜の指示よりはもっと激しくですけれども、もう一度現場に行く可能性があるというのがあったので、それは私ではなくてこれも岡本が言われていたと思いますけれども、一応防衛省の秘書官を含めて、ヘリコプターは何時になったら飛べるのかとか、そういう整理を全部していましたので、それを基本的にはいつも車といったら岡本が乗るのですけれども、そのときは岡本ではなく私が隣に乗って、もしそういう環境になった場合には、正直総理が行かれる場合には警護官の人間も秘書官の人間も私も含めて一緒に行かなければいけなくなる。まだ警護官も含め私も秘書官も含めて若いので、岡本もまだ 40 とかなので、そこまで覚悟ができていない人間がいると思う。なので、そのときにはそれ相応の配慮をしてくださいという話はしました。

だから、総理が行かれることに関しては最大限努力するけれども、ある種決死隊のように自分たちまで行けるかとなると、そこはできていないからちゃんと整理しますという話の了解をとりました。そのときは総理は非常に冷静でした。それはわかっていると。放射能に対する瞬間的な放射能及びそういう怖さは十分わかりながらも、とはいえ自分は 60 を過ぎていたので、自分が行って影響が出るのは何年後だからということは冷静に考えていました。そういう話をしたことと、ある種乗ったのはそういう整理をするのと、かなり総理は気持ちが前までは高ぶってらっしゃっていらっしゃったので、それをダウンさせようと思って乗り込んだというのがあれなので、ただ、私の心配は杞憂に終わって非常に落ち着いていました。

○質問者 わかりました。実際、統合本部に行かれて、総理が訓示というかお話をされたこと伺ったのです。

○寺田補佐官 そのときにはまた改めて自分で話しながらかなり気持ちが入ってしまって、10 分ぐらいお話をされて、基本的には撤退という話があるけれども、ないと。撤退したらどうなるかというのは皆さんが一番わかるでしょうと。そんなことをしたらまず日本だっただめになるし、もっと細かいことを言えば東電だってなくなるんですよと、覚悟を決めてくれと。60 以上の人間は、最後は自分がその場において作業するぐらいの覚悟を持ってやりましょうというのを、同じことを 3 回ぐらいループしながらしゃべってました。

○質問者 その中で自分もその覚悟であるといったような趣旨の発言をされていると聞いたことがあるのですが。

○寺田補佐官 そうかもしれないですね。はっきりそういうような言い方をしたかというよりは、官邸側の方としては、当然海江田さんとか枝野さんにかかっている電話の内容を含めて言うと、組織としてもう撤退を決めたがっていると。勿論、現実的には危険性

【取扱い嚴重注意】

というのは現場にどんどん迫っていますから、それをどのように押さえるという言い方は失礼ですけれども、とはいえ彼らがいなくなった場合にはいくら自衛隊が出て行ってもオペレーションのやり方がわからないですから、何とかして彼らをとどまらせなければいけないという思いがあったので、とにかくそういうふうには君らは覚悟を決めてくれというニュアンスが主でした。

○質問者 わかりました。私からはこの部分で最後なのですけれども、統合本部という本来のたてつけにない組織ができることについて、補佐官御自身の意見であったり、総理の周辺の方の御意見というのは何かございましたか。

○寺田補佐官 私自身としては、たてつけとして本来あるかないかはありますけれども、既存のたてつけ自体はオフサイトセンターも含めて予定していたものはいきなり機能不全になったとか、何よりも保安院自体が独自に自分たちで情報を上げる能力がないと。全部東電から聞かないとわからないと。その東電自体が果たして全部のシビアアクシデントをコントロールできているかといえばコントロールできていないと。予見性もない。パラレルにも考えきれていないというところで統合本部をつくって、統合本部というのか、政府が最大限の助力をして警察も自衛隊も含めてやるには、その場に行って生の情報をその場で聞かないとわからないよなという帰結になったのは一定の理解はします。

ただ、私自身としては、法律上それはどうなっているのか。そういうことをやる権限があるのかどうかとか気になりましたし、先ほど少し申し上げた、逃げようとか撤退しようとしている方々を、いやあなたたちはやらなければいけないのですと言うには法律の力というのも1つはあるので、そういうものがないかどうかというのは、私は考えていました。ただ、それ自体は非常に今そういうことを考えている場合ではないと枝野長官に怒られたりしていましたけれども、一応そういうような形でやっていたと思います。

その瞬間自体がいいか悪いかというのは、それを立ち上げてからというものを線量の問題などの情報というのはもう劇的に変わりましたので、ある種瞬間としていいかどうかという判断はできませんでしたが、結果論としてその後、線量などは分単位でわかるようになりまして、現場の状況もわかるようになりまして、それに向けて何をすればいいのかということも物すごいスピーディになりましたので、結果論としてはせざるを得なかったと思います。その瞬間としてどう思ったかというのはさっき言ったとおりです。

○質問者 清水社長が官邸にいられた15日未明のことなのですけれども、先ほどのお話ですと、バッチを持ってらっしゃる国会議員の方と、あと瀧野副官房長官がいられたということなのですが、この中に班目先生とあと保安院の安井さんは入られていないですか。

○寺田補佐官 私の記憶は入っていないと思いますが、そのお二人に関しては入っていても違和感はないと思います。特に安井さんに関しては違和感がないです。とにかく安井さんに関しては、13日からですけれども、非常に冷静に分析されているなというのがバッチ組の雰囲気でもありましたので入っていてもおかしくないと思いますけれども、ただ、いつものメンバーより藤井副長官であったり、松本大臣であったり多めにいらっしゃったの



【取扱い厳重注意】

で、その方々だけでしゃべっていたという記憶があるのです。

○質問者 わかりました。総理を応接室に呼んで、応接室で撤退の可否、是非について議論する前の段階で、つまり総理がまだいらっしゃらない段階で班目委員長が撤退についてどんなふうに述べていらっしゃったかということについて、何か御記憶はありますか。

○寺田補佐官 具体的な言葉は記憶にないですけれども、非常に悲観的でした。安井さんも主観論を入れてしゃべるといふよりは、客観的に非常に厳しい状況といふのは今後より一層深まるというようなニュアンスのことをしゃべられていました。なので、結論からすると、撤退といふのは国家としてはあり得ないものだといふ私も今、思っていますけれども、いわゆる御前会議で議論するときに総理が強い口調で各専門家に詰問をされたので、私は正直カットインして冷静に答えられてくださいと、撤退するかしないかは政治で判断することですから、本当に炉の状態がどうなるかということだけ中心にお考えになってくださいと言ったのですけれども、皆さん撤退はないといふ話をされました。

なので、もともと総理が入る前の打ち合わせでは非常に悲観的な見通しがあったなどいふのは思います。班目さんもそういうようなニュアンスのことを言われていました。細野さんは「班目さんが前の回で、総理が入るまでは『もうだめだ』みたいなことを言っていたけれども、総理のときには『大丈夫だ』みたいな言い方をしていた。あの人は信用できないな。」みたいなニュアンスのことを後でぼろっと言われていたことはあります。

○質問者 印象としてはそんな印象は寺田先生もあったのですか。

○寺田補佐官 私もありました。全体的に今撤退したいといふのをみんなで、勿論、相当深刻なダウンスケールばかりでしたけれども、深刻な状態が続いているのでみんな気持ちがかかなり押し込まれていましたけれども、それでも、今はだめだと踏ん張りかえしたとはいへ、先が見えないことに関しての不安感はみんなあったのです。なので、班目さんやら安井さんがそういうような見通しを言うこともかなり重くみんな響いていたという記憶はあります。それを総理がある種何があったって撤退はないといふところで方向が決まったという感じはありました。

○質問者 あと1点だけ済みません。全く話題が変わるのですけれども、SPEEDIの情報を寺田補佐官御自身が目にされたのは御記憶ございますか。

○寺田補佐官 私はずっと仕事をしている合間も、それは仕事としてやっていたけれども、ツイッターとかも含めていろいろ見ていたのです。11日の夜くらいからアメリカの技術的支援を日本政府は断ったということは、私たちにしてみると、根も葉もないような話が広まっているので、そういう噂とかの管理もしたいなといろいろ見ていて、SPEEDIというのもあるらしいみたいなことを、なぜ使わないのだとだれかが言っているとか、そういうのを私は最初ツイッターレベルで知っていたのです。それと同時に多分福山さんもだれかから言われたのか、SPEEDIというのがあるらしいなといふ話は耳に入ってきたのです。

私は班目さんの記憶なのですけれども、班目さんか班目さんの下の方、安全委員会の方

【取扱い厳重注意】

に SPEEDI というのがあるらしいねという話を 11、12 のレベルではなくてもうちよつと経った後に聞いたはずなのです。そのときに、班目さんですけれども、はっきり回せませんと、実データがない限りは回らないのですと。だけれども、あると言っているよといっても、だから、あるのですけれども、どれだけ放射性物質が出たかというのがわからないとそれは計測できないのですとかなり強く言われて、そうなのかとあきらめていたというのが実際なのです。なので、後々 11 日中に SPEEDI が買い回しされてあったと聞いたときには、またどこかでデマがつけられたのかなとかなり過ぎた後に思ったぐらい、当時は全く聞いていませんでしたし、避難区域を決めるときも危機管理監がいましたけれども、危機管理監からはその話も出ていませんでしたし、班目さんもいましたけれども、班目さんからも出ていなかったのも、正直それは後ほどそういう事実があると聞いたときにはきつねにつままれたような感覚を多分 5 階の人間はみんな持っていたと思います。

○質問者 それは統合本部ができる前の段階ですか。

○寺田補佐官 全然前です。後も含めて。ようやくそう言っていた班目さんが持ってきたのが 23 に持ってきていますので、それは初めてだとみんな思っています。

○質問者 わかりました。

○質問者 SPEEDI については、放出源の総量がわからなくても、あるシミュレーションをすれば定量的にはわからなくてもどちらの方向へ放射能が行っているとかそういうことはわかるから、避難の参考データとして非常に重要だったのではないかという解釈が可能なのですけれども、そういうような視点で議論というものはこの 1 週間ぐらいの間ではなかったですか。

○寺田補佐官 本当になかったです。もしあったとしたら当然使っていたと思います。何度か福山さんは聞かれているのです。本当にはっきり言って使えないと一蹴されていた記憶しかないのです。なので、ひたすら同心円が続いていたというのが結果的に見るとそうなんだと思います。

○質問者 菅総理の反応はどうですか。使えないという話に対しては。

○寺田補佐官 菅総理の目の前で班目さんが話をされているというはっきりとした記憶は確実にはないのです。ただ、菅さんもだれかからはそういうのはあるらしいよというのを基本のルートではない形でお知りになられていたのかどうかわかりません。いずれにせよ、正式になんやかんや言いながらも避難区域の距離の確定も含めて安全委員会の方々の御助言を受けるというスタンスをやってきましたので、22 か 23 のときに出されたのも初めてのものとして総理としてもお考えになられていると思います。

○質問者 避難区域を 11 日から 12 日にかけて変更しているわけですがけれども、変更するときの基本的なデータとしてモニタリングポストなどのデータとか、モニタリングカーのデータとか、いろいろと汚染範囲が広がっているみたいなことは当然いろいろ報告があったのではないかと思うのですが、これは判断するときには原発プラント自体が危機的だから避難させるということだったのか、線量が上がっているから避難させるということだった

【取扱い厳重注意】

のか。

○寺田補佐官 ここに書かれている括弧の何日からのを言うと、大方は多分爆発的な事象、一番最初は 3.11 はそうですけれども、3.12 自体は線量が第 1 プラントの近くの線量が上がり始めたという話で多分やったのだと思います。そういう報告を受けた後でしたので。

正直言うと、政府として文科省がやっていたのでしょけれども、周辺の市町村の線量がどうかというデータは、この直近のころはなかったと思います。東電が持っている自分たちのプラントの線量がどうなっているかというのはよく情報が入ってきましたけれども、今あるような何市がどれぐらい、何市が何とかというのをもって線量がこれぐらいだからここまでは退避させようとかという話をこの 3 月 11 日～15 日とかという間にやっていたとは私の記憶にはないです。

○質問者 実際に被曝している、健康被害が出るかもしれないとか、あるいはかなり浴びているかもしれないという危機感というのは官邸内においてはなかったのですか。

○寺田補佐官 作業員の方ですか。それとも住民の方ですか。

○質問者 住民。

○寺田補佐官 住民の方にはそういう可能性があるということを別に没却してやっていたわけではないとは思いますが、実際どのような線量になっているのかとかということ自体をリアルタイムで把握はできていなかったとは思いますが。

ヨウ素剤のときか、淡い記憶になるのですが、ヨウ素剤を飲ませるか、飲ませないかという話というのは、具体的な日時は覚えていないですけれども、議論があったときに。

○質問者 恐らく 23 日が最初だと思います。

○質問者 小佐古先生はいらっしゃいましたか。

○寺田補佐官 小佐古先生は 16 ぐらいか。

○質問者 その議論をされたときにです。

○寺田補佐官 小佐古さんがいたときだったかな。安全委員会か保安院どちらかだと思いますけれども、それは自治体も持っているので医者が適したタイミングで飲むみたいな話をしているときに、それはどういうタイミングが適しているのかと、どれぐらい線量が上がっているのかというのがないと、それは医者だってわからないでしょうみたいな話を政治側がしゃべっていたような記憶があるのです。なので、そこから勘案するに、ではどれぐらいの地域がどれぐらい上がっているかというの把握できていなかったのではないのかなというのがかなり後からの自分なりの思い起こしの検証になります。実際、福島市がどれぐらいだとかというのを 15 ぐらいの間にリアルタイムでは見ていなかったですし、またそれを分析できるような感じではなかった。とにかくモニタリングポストでは車を走らせて線量を測れとか、後々、時間軸はわかりませんが、どの地域がどれぐらいかというのを一括で経産省のホームページにやるとか何とかというのはやっていたけれども、本当にこの緊迫した 3.11 から 3.14 ぐらいまでの間に避難区域を決めるときに、どの地域がどれぐらいだというのを綿密にわかる状態だったかというのはなかったと思いま

【取扱い厳重注意】

す。

○質問者 周辺のモニタリングポストはほとんどアウトになっていましたね。

○寺田補佐官 という話をそのときに受けました。

○質問者 それと危機管理という基本的なことになるわけですけれども、こういう経過を見て、特に最初の数日間の経過を見て振り返ってみて、やはりこういうところが一番問題だったとか、こういう難しさがあつたとか、その辺りについて感じられていることがありましたら。

○寺田補佐官 全般的に準備ができていなかった。準備というのは物理的な準備もそうですし、想像という意味でのリスク範囲を決めるという意味での準備不足もありましたし、想定したリスク範囲をこなすというトレーニングという意味での準備もなかったなと思います。

このような原発事故が起きたときにどうすべきかということを瞬時に判断して行動できる政府ではなかったと思いますし、それは菅総理ではなくて違う総理があつたときだつたらと言つても、多分同じようなレベルだつたと思います。保安院自体、いろんな見方はありますけれども、保安院という原子力の事業者をまさしく保安する人間、組織自体が独自に線量を測ることができないと聞いたときに正直驚きましたし、せめて東電から情報をもらわないと、チェックしなければいけない側がチェックされる側のデータしか持つてこられないということ自体に物すごくびっくりしましたし、あと政府の組織自体も、SPEEDIも結局そうでしたけれども、省庁再編のあおりを受けたのかどうか知りませんが、文科省の旧科技庁のところの実働のモニタリングをする部隊があつて、保安院は持っていません。保安院は文科省から聞かなければいけなくて、それを統括するはずの内閣府の安全委員会自体がアメリカに比べると月とスポンぐぐらいの危機管理能力しかないという行政体としての仕組みとしても物すごくおろそかになっていましたし、事業者としてもシビアアクシデントの範囲が余りにも浅いというのと、浅い範囲の中でのトレーニングもできていなかったというのと、政治側もそれに対する準備をしていなかったというところは、そもそもどちらかというところと、さまざま検証してやっていくのでしようけれども、3.11から後のオペレーションがどううまくいったかというところよりも、もう既にそれまでに準備されていたさまざまなことが余りにもすべて不足していたのではないかなというのが率直な思いです。

○質問者 根本的にはどこにあつたとお考えになりますか。

○寺田補佐官 もう陳腐化された言い回しですけれども、やはり安全神話的な過信があつたとは思いますが。やはり原子力の持つ怖さというのは十分わかっている国であるはずなのに、それを利用することに対する安全意識というものが他の国に比べて圧倒的に低かつたなと思います。だからこそ保安院自体がしっかりと東京電力なり事業者を管理できていない、保安できていないというのが1つの象徴かなと思いますし、政治側もそれが大きなリスクであるということをわかっていなかったのというのも反省しています。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それともう一つは、具体的な対策本部づくりなのですけれども、国の防災対策基本計画によると、こういう事態が起こったときに各省庁から集まって、まさに [ ] [ ] 対策本部が本来そこで意思決定をしたり機能したりするわけですが、その一方、5階で菅総理を中心として幹部が集まって協議して基本方針を決めるという二重構造になってしまった。下の方では結構各省庁からいろんな情報が入ったりとかしていたはずなのですね。それとの関係が二重構造であるがゆえに情報が十分生かされなかったとか、上に上がっていなかったとか、いろいろ問題が起こったのではないかと思います。

○寺田補佐官 まさしくそこを問題視されている部分があるのかなとお伺いしながら思いましたけれども、例えば下の危機管理の事務的なトップは危機管理監ですけれども、基本的にずっと下に勿論おりました。何かあるたびに避難区域の確定とかで上に上がってきてもらったと。私は5階にいた人間として、危機管理監に来てもらって下の情報集約の一応トップですから、そこが一番物事を知っているものだと思っていて、それを基にいろいろ判断をしていたのだと思います。

なので、私はどちらかというと地下と5階との断絶というよりは、その事務自体が事務レベルの中でのトップまでに上がる連絡組織、連絡体系というのが果たしてうまくいったのかなと。例えば SPEEDI の情報自体がなぜ危機管理監に上がらなかったのかなというのは後々皆さんでいろいろ検証しているのを見て不思議に思ったので、もし伊藤危機管理監であったり、官房副長官の事務でもいいですけれども、ここと政治側が物理的に断絶をしていて事務の情報が政治に上がらないというのであれば、まさしく地下と5階の断絶のような気がしますけれども、5階は5階で議論しながら重要案件は危機管理監を含めて、瀧野さんも含めてずっと5階にいて議論しているわけですから、そこはちょっと単純な地下と5階の分離というのは安直かなと。

まさしく先ほど申し上げた内閣府と文科省と経産省、保安院と東電、ここら辺が全体的にうまく情報を集約できていない。それは集約するべきところが地下だとしたら、地下の中で事務方として上まで上がり切っていないと、当然、そのトップの危機管理監以外の下の人間がそこを通り越して政治側に情報を上げるというのは考えにくいことですから、勿論、5階と地下というものの物理もあるとは思いますが、その前に1回、本当にあそこの危機管理センターというものが情報集約として政治側までいかないまでも、危機管理監とか含めて上がる組織になっていたのかなというのは、物すごく私は疑問に思いました。

○質問者 どうすればいいかという辺りについてはいかがですか。

○寺田補佐官 さっきと繰り返し言うてはあれですけれども、文科省自体がモニタリングをして、それを他の省庁の保安院が取るといようなことをやっている限りは無理だと思います。やはりアメリカの例とかを見てみても、一体的にそれは全部1つの組織の中で完結して独自にやるという形をとっていますので、今度原子力安全庁ができるときにも、相変わらず文科省にモニタリングの実働をさせようとしているという縦割りの雰囲気がある

【取扱い厳重注意】

ことは、私は両文科大臣と細野さんに申し上げましたけれども、やはりそういうところから一つひとつ上がるはずだった情報が上がらないというのはあると思いますし、あと事業者と保安するチェックする国の体制自体がかなりの緊張関係にない限り難しいだろうなど。保安院自体がもうデータも含めて全部、保安院自体は文科省に国独自のモニタリングを任せ、炉がどうなっているかということと全部事業者に任せているということ自体無理です。私はこれから原発を動かすということの判断はあるにせよ、各原発自体に保安院自体が独自の人間をちゃんと常駐させ、独自の、事業者ではない形で情報をしっかり上げる仕組みを持つておくということも必要だと思います。

それら全体自体が今回起きた事故よりもより一層深刻なことを想定した設計図の中でやると。飛行機と一緒にですけども、どこかのエンジンが壊れたら、どこかのエンジンが補完するぐらいの多重的なことを積み重ねて、より今より深刻なケースを想定した危機管理体制を持つというぐらいが必要かなと。ちょっと話が散漫になりましたけれども、そういう思いがあります。

○質問者 いや、明確です。それを妨害するものというか、相変わらず文科省が SPEEDI を管理するとか、そういうふうに文科省側もそうだし、政府のもっと上からもばちっとはめ込むようなのができない条件は何なのでしょう。

○寺田補佐官 役所自体は既得権益を守ろうとする、文科省にしてみればどうしてもモニタリングしたいというよりは、その部署を抱えている以上、そこを手放したくないという組織防衛の1つだと思うのです。それはそれでよくないことですけども、彼らにとってみればやむを得ないのかなと思う。そこは政治がおかしいものはおかしいと言ってまとめる、政治的な力がないというのは問題だと思いますし、一義的にはそこですけども、あとは国民全体として、もう一回原子力はどうするのかということとちゃんと考え直して政治を動かしていないということもあるとは思いますが。やや政治的な話になって申し訳ないです。すべては政治の責任だと思います。

○質問者 先生、時間は大丈夫ですか。よろしいですか。

○寺田補佐官 もうちょっと大丈夫です。

○質問者 長い時間ありがとうございました。

○寺田補佐官 私もなぜあんなったかというのは十分本当に将来のために勉強したいと思っていますので、是非よい報告書を出していただければと思います。

○質問者 ありがとうございました。